

へムケ、マスランカとの 運命的な出会いと 雲井カルテットの

原点

9月にヤマハホールでマスランカの新作初演を行い、世界への発信力を一層高めた雲井カルテットを率いつつ、自身のサクソフォン世界にますます円熟味を加える。

取材・構成：佐藤淳一(サクソフォン奏者) 撮影：岡崎正人 記事協賛：ヤマハ株式会社

Kumoi

——今年6月に行なわれた雲井雅人サクソクス四重奏団のシカゴ公演は大成功だったようですね。

雲井 フレデリック・ヘムケがノース・ウエスタン大学在職50周年を機に退職されることになり、このコンサートはそのセレモニーの一環でしたが、僕らだけ50分ものまじまった時間を頂けたんです。プログラムは、バッハのバルティータと富山県民謡、それに伊藤(康英)さんの琉球幻想曲の3曲。最後はもう、みんなスタンディングオベーションで、僕らも感動しました。

——母校(ノース・ウエスタン大)に帰られたのは久しぶりですか？

雲井 2007年にカルテットでアメリカを回ったとき、ノース・ウエスタン大学でデイヴィッド・マスランカの《レシテーション・ブック》を作曲者立ち会ひの下で初演しています。

行くたびに「帰ってきた！」って感じがするんですよ。ヘムケに「だから母校に帰ることをhomecomingって言んだ」と言われて、本当にそうだと。昔と同じような風景、同じ建物があり、学生も当時とまったく変わらず、ジーパンにトレーナー姿で教科書抱えて歩いている。向こうの学生たちの格好は30年前と見事に変わらない。感心しますよね。

——サクソフォン四重奏に対して、アメリカの聴衆の反応はいかがですか？

雲井 ものすごく良かったです。僕らは、あたり前にハモリ、良い音で、きちんとした解釈のもとに演奏することだけをやってるつもりで、雲井カルテットとしてはそれが普通のことなんです。アメリカの人たちには、それが驚くべきことに映ったようです。いろんな人に「こんなにハモるカルテットは聴いたことがない」

と言われました。そう言われて、もちろん嬉しいんだけど、ハモってない方がおかしいわけですよ。アメリカのカルテットはどうなんだろう？」と内心思っていました(笑)。

——雲井カルテットの「原点」は純正にハモることだと以前うかがいました。

雲井 これはパイパーズのお陰なんです。パイパーズの記事で、フルートのウイリアム・ベネットが「差音」について話していたんですね。差音というのは、二つの音が完全にハモったとき、二つの音の周波数の差が低い音で聞こえるというのですが、それをベネットは練習に取り入れていると書いてあった。そのとき僕は差音というものを知らず、「そんなバカなことが起こるはずがない」と思った(笑)。でもやってみたら、びったりと合った時に、はっきりと下の音が鳴るんです。以来それにはまり、「これを4人でやったらどうなるんだろう？」と考えた。それが雲井カルテットの原点です。今となっては、いろんな演奏を聴いて「なぜみんなもってハモらないんだろう？」とよく思います。例えば、サクソスの真ん中の下は低く、レは高いですが、「それを解消しないで、なぜソロが吹けるの？アンサンブルが出来るの？」と思ってしまふ。これはずっと言い続けていることなんだけれど、「まあ仕方ないや」という脳天気な声をよく聞くわけです。でも、オーケストラだったらそれは通用しない。なぜサクソクスにはその常識が広まらないのかと思いますよ。

マスランカとは本当に通じ合っている

——雲井カルテットは9月30日に銀座のヤマハホールで10回目のリサイタルを

Masato

雲井雅人

サクソフォン奏者

ヤマハホール
STAFF ONLY

アメリカ公演で「こんなにハモるカルテットは聴いたことがない！」といわれ……

PROFILE

雲井雅人(くもい まさと)

1957年、富山県生まれ。国立音大を経てノースウエスタン大学大学院修了。第51回日本音楽コンクールと第39回ジュネーブ国際音楽コンクールに入賞。ソリストとして新日本フィル、京都市交響楽団、関西フィル、名古屋フィル、北京中央楽団などと共演。ソロCDに「雲井雅人サクソフォン・リサイタル」(キングレコード)「ドリーム・ネット」(CAFUA)。「雲井雅人、あふれる歌へのオマージュ」(アルケミスタ)。宗貞啓二、大室勇一、フレデリック・ヘムケの各氏に師事。尚美学園大、国立音大各非常勤講師。亜細亜大吹奏楽団コーチ。雲井雅人サクソクス四重奏団およびコレジオ・サクソクス四重奏団主宰。1996年、富山県ひとつくり財団より「とやま賞」(芸術文化部門)受賞。使用楽器はアルト：ヤマハYAS-875、テナー：ヤマハYTS-875、ソプラノ：ヤマハYSS-875EXHG。